

星座と視覚

——アドルノにおける視覚をめぐって——

青柳 雅文*

はじめに

本稿の目的は、Th・W・アドルノにおける視覚の問題について、いくつかのモチーフを示すことである。とりわけ見ることと現れること（見えること）に焦点をあてることにしたい。そしてその手がかりとなるのが星座¹⁾という比喩である。そもそもアドルノにおいては、たとえば美学や芸術理論を手がかりとして、視覚の問題を考えることはできるであろうが、むしろ彼にとっては聴覚の問題のほうが重要であろう。そしてこのことによって、アドルノは視覚にたいして批判的な態度をとったとされている。こうした見方は、すでに多くの研究者によって取り上げられ、論じられてきている。たとえばM・ジェイは「一般にドイツの思想家たちは、著作の中で絵画よりも詩や音楽に依拠する彼らの傾向が示すように、しばしば視覚経験にはない特権を聴覚経験に与えてきた」(Jay, 265 [232])と指摘している。このことは、アドルノが音楽理論をつうじて、視覚よりも聴覚の問題を論じていたことからわかる。そしてこのように、視覚中心主義にたいする疑問視は、ドイツの思想史的伝統においてアドルノにも受け継がれてきた。ジェイが指摘するように、「フランクフルト学派のメンバーのようなマルクス主義者たちでさえ、直接的には古代ユダヤの禁止令に由来するが暗黙のうちに長年のドイツ的傾向にも合致することになった図像化禁止 (Bilderverbot) の力を十分に理解していた」(ibid., 265 [233]) のである。それゆえアドルノにおける視覚の

* 立命館大学文学部非常勤講師

問題を取り上げる場合、本来ならば聴覚の優位性とともに関の反視覚的言説について語るのが適切かもしれない。とはいえ、前述のように、こうした研究はすでに多く世に出ており、論じ尽くされている感もある。そこで本稿では、アドルノの言説そのものに内在している視覚性に注目することにした。つまり、彼が対象とする視覚の問題ではなく、彼自身が意図せず語っている視覚あるいは反視覚に注目するのである。そしてこうした視覚性を、彼の思想の核心部分と関連づけることによって、彼の思想そのものの視覚性を問うことが可能になるのではないかと考えられるのである。ただし、こうした視覚性の全体像を浮き彫りにするには、彼の思想を網羅的に検討する必要があるであろう。本稿では、こうした検討に先立って、その手引きとなる諸問題を取り上げ、解明のための示唆を与えることとしたい。

1. 星座と視覚

アドルノにおける星座という比喩は、W・ベンヤミンの用法に由来する。そこでまずベンヤミンの代表的な用例について、彼の『ドイツ悲劇の根源』における叙述を取り上げたい。彼がこの比喩を用いているのは、理念と現象（彼は事物とも言い換えている）との関係について述べた箇所である。それをいくつか引用しておこう。

〔……〕諸現象は、仮象が混ざり込んだ粗雑で経験的な状態で丸ごと理念界に入ってゆくのではなく、その諸要素へと分解されることでのみ、救済されて、理念界に入ってゆく。諸現象は、その偽りの統一を手放すことによって、分割されて真理の真正な統一に参加する。この分割において諸現象は、諸概念に従属する。諸事物を解体して諸要素へと分解するのが、諸概念である。(Benjamin, 213-4 [30-31])

理念を介した現象の救済が遂行されることによって、経験を手段として理念の呈示が遂行される。なぜならば、それ自体においてではなく、もっぱらただ事物的な諸要素を概念の中に秩序づけることにおいてのみ、理念は呈示されるからである。しかも理念は、それらの事物的な要素の星座 Konfiguration として実行するのである。(Ebd., 214 [31])

ある理念の呈示に仕える概念グループは、その理念を、事物的諸要素の星座 Konfiguration として現前させる。なぜならば、理念のうちに諸現象は同化されないからである。諸現象は理念の中には含まれていない。むしろ諸理念は、諸現象の客観的な潜在的配置であり、諸現象の客観的な解釈である。(Ebd., 214 [32])

理念の持つ意味は、ひとつの比喩によって言い表せるであろう。諸理念と諸事物との関係は、星座 Sternbilder と星々との関係と同じである。これがまず語っているのは、理念は事物の概念でもなければ事物の法則でもないということである。諸理念は、諸現象の認識に仕えるのではなく、諸現象は理念の存立にとっての規準ではありえない。むしろ諸理念にたいして諸現象が担っている意味は、それらの概念的な諸要素に尽きる。(Ebd., 214 [32-33])

諸理念は、永遠の星座 Konstellation であり、そして、諸要素がそのような星座の中に位置する点としてとらえられることによって、諸現象は分割され、かつ同時に、救済される。(Ebd., 215 [33])

このようにベンヤミンは、理念と現象との関係の中で、端的に星座という比喩を用いている。ところでこの関係は、いくつかの特徴を持っている。第一に、理念が諸現象のたんなる集合体や総和ではないということ、それゆえ両

者が完全に合致するわけではないということである²⁾。このことは、われわれは現象をつうじて理念を把握するが、理念がそのすべてを現象として示しているのではない、ということの意味している。第二に、理念と現象は、そのどちらか一方がかならずしも優位に立つことがないということである。そして第三に、両者はその意味において合致することがないが、配置と構成要素という形式上の関係においては合致しているように見えるということである。以上のような特徴とともに、彼は理念と現象を理解し、それを星座と星々によって比喩的に表現しているのである。

では次に、アドルノにおける星座という比喩について、彼の初期講演から取り上げよう。これもいくつか該当する箇所がある。

〔……〕 問いに散在している個々の要素を——そこから解決策が飛び出てくるとともに問いが消失するような形姿へとまとまるまで——、さまざまに配置することによって、哲学は、科学から受け取っている諸要素を——答えとして読み取りうるのと同時に問いが消失するような形姿に至るまで——、さまざまに入れ替わる星座 *Konstellationen* へと、あるいは占星術的でなく、科学でアクチュアルな表現で言えばさまざまな実験的配置へと置き換えなければならないのです。哲学の課題とは、現実の隠れていて手元にある意図〔＝志向〕を探究することではなく、意図〔＝志向〕なき現実を解釈することです。このことは、現実の孤立した諸要素から形姿や像を構成することで、科学が簡潔明瞭にとらえることを課題としている問いそのものが止揚されることによって果たされます。(Adorno, 335 [21])

哲学をつうじて概念素材 *Begriffsmaterial* を扱う際に、私はそれなりの意図で、グループ化と実験的配置、星座 *Konstellation* と構成について語っています。というのも、歴史的な像は——現存在の意味を形成している

のではなく、その意味への問いを解きほぐし、解消させますが——、こうした像はたんなる自己所与性ではないからです。それらの像は歴史においてすでにできあがったものとして有機的に存在しているのではありません。それらに気づくのに観ること Schau も直観 Intuition も不要ですし、それらは、受け入れ崇拝すべきような歴史の魔術的な神像でもありません。むしろ、それらの像は人間によって作り出されなければなりませんし、それらの像が最終的に正当化されるのはひとえに、その周囲に現実が決定的な明証でまとまっていることによってなのです。(Ebd., 341 [31-32])

重要なのは、理念の星座 Konstellation——しかも変移という理念、意味作用という理念、自然という理念、歴史という理念の星座——です。これらの理念は「不変項」として参照されません。これらの理念を探索することが問いの意図 [=志向] でもありません。これらの理念は、これらの契機の一・回・限・り・の連関の中で自ら打ち明けるような、具体的な歴史的事実の周りに自らまとまるのです。(Ebd., 359 [68])

彼の講演の主題や内容は、ベンヤミンの場合とは異なっている。それゆえ単純にふたりの見解の異同がわかるわけではない。だが彼の講演は、ベンヤミンにおける星座を援用していることには違いない。その証左のひとつは、彼が星座を理念として理解している点である。この彼の理解は、ベンヤミンの理解と一致している。したがって星座という比喩にたいするふたりの見解は、基本的に一致したものだと考えられるのであろう。

それでは星座という比喩と視覚との関係について検討を加えたい。そもそも、われわれが何かを見るとき、われわれは何かの現れを見る。その際、われわれが見るものはわれわれに現れるものと合致している。より正確に言うならば、見るものと現れるものは合致しているはずだ、という前提の上に

立って、合致していると理解している。では、たとえばわれわれが夜空を見上げるとき、われわれが見ているのは何か。アドルノらの見解にしたがうならば、われわれが見ているのは星々である。つまり、われわれに現れているのは現象としての星々であり、これがわれわれの見ているものと合致しているのである。ところで星々は、何らかの配置とともに現れる。一般的な理解において、われわれは、この配置を星座とみなすかもしれない。つまり配置という形式からして、星々と星座は合致しており、同じ事柄を指し示しているように思える。この一般的な理解が生じるのは、星座が視覚に由来するものであり、それ自体で視覚的だからである。つまり、現れるとおりに見ており、また同様に見ているとおりに現れている、というわけである。しかしながら彼らの理解によれば、星座は、われわれに呈示されるが、われわれが見るものとはかならずしも合致するとは限らない。それはわれわれが見ておるとおりに現れていない、ということである。この不一致は、それぞれこの配置に含まれる意味内容が異なることによって生じる。われわれに顕在的に現れているのは現象としての星々であって理念としての星座ではない。むしろ星座は潜在的な意味内容として呈示されるに過ぎない。理念としての星座が呈示されて顕在的にわれわれに現れたときには、すでにそれは現象として現れているのである。星座の意味内容はわれわれが見るものと同じとは限らない。したがって星座は、われわれの視覚を、つまりわれわれの見ることと現れることを裏切る可能性をつねに持っており、その限りで反視覚的性格を帯びているのである。

2. 星座の歴史的性格

星座がそもそも視覚的であるにもかかわらず、反視覚的性格を持つのはなぜであろうか。前述のアドルノからの引用には、その理由が示唆されている。それは星座が歴史的な性格を帯びているという点である。星座が歴史的である

ということは、それが一種の時間性を含むということである。しかしそれは機械的に進行する時間性ではない。つまり星座は、われわれが計算するとおりの時間的進行を持つのではない。しかもそれはわれわれの営みにおける時間性のことではない。それゆえ、星座はわれわれの視覚の領域においてわれわれの見ることと自動的に対応できるのではない。むしろ星座は、われわれとは異なる時間性を持っている。このように、星座はわれわれの見ることやその意図とは異なる意味内容をともなって呈示される。ただしこの差異は、星座がわれわれの視覚や意図から完全に独立していることを意味するのではない。むしろわれわれは、見ることによって、星座の持つ別の時間性を意識するのである。つまり星座の歴史性は、それを見ようとするわれわれの視覚や、アドルノの言うところの「意図」との関係が不可欠である。

以上のように、星座が反視覚的なのは、それはそれで歴史性を持っているからである。だが星座の歴史性は、視覚との関係を必要とする。したがって、星座が反視覚的であることは、星座が視覚的でないことを単純に意味するのではないのである。

3. 視覚と仮象

前述のように、視覚の領域において、理念としての星座は反視覚的な性格を帯びる。換言すれば、われわれの見ることは、星座と合致することがなくても、現象としての星々と合致するはずである。この見ることと現象との関係について、ふたりの理解は異なっている。その手がかりとなるのは、仮象 Schein の概念にたいする理解の相違である。

ベンヤミンの場合、現象は、たしかにわれわれの見ることと合致するとはいえ、仮象を含んでいる。仮象は、文字どおり現れ、外観、見かけという意味を持つ。これにたいして、真理をわれわれにもたらすのは理念である。前述の引用にもあるように、仮象は現象を「粗雑で経験的な状態」にするもの

であり、理念との「偽りの統一」をもたらすものである。こうした仮象を含む現象界は、真理の世界からすれば瓦礫と廃墟の世界に過ぎないであろう。むしろわれわれの視覚の領域には、「真理の真正な統一」を形成する理念が星座として呈示される³⁾。そして星々は、この理念の要素である限りにおいて意味を持ち、仮象から区別されるのである。それゆえベンヤミンにとって仮象は、視覚における偽りの現象であり、あくまで見せかけの意味以上のものを持たない。そして彼にとって仮象は、現れるままの視覚的なものだが、虚偽的なものとして否定的に評価されるのである⁴⁾。

その一方でアドルノ場合、講演では自然と歴史との関係において仮象について語られている。その箇所をいくつか以下に挙げておこう。

〔……〕 私が仮象について話すのは〔……〕 第二の自然という意味においてです。この第二の自然は、有意味なものとしてあることによって仮象の自然なのですが、この自然における仮象は歴史的に生み出されたものです。この自然が仮象〔＝見せかけ〕という性格を帯びているのは、現実がわれわれから失われ、空虚であるにもかかわらず、われわれが現実を有意味だと理解できると思い込んでいるからです〔……〕。(Adorno, 364 [77])

〔……〕 注目すべきは、仮象というこの歴史内的な存在自体が神話的な性質を備えていることです。(Ebd., 364 [77])

〔……〕 仮象がたんなる比喩に過ぎないということにたいして、仮象の現実性という契機があります。すなわち、仮象に出会うときにわれわれはいつも、それを何らかの表現として受け取るのであって、仮象はたんに除去されるべき見せかけという性格を帯びたものではなく、その仮象の中で現出する何かを表現しており、しかも、その仮象から独立に記述

することのできない何かを表現しているのです。これもまた仮象の神話
的契機です。(Ebd., 365 [79])

私が考えているのは、世界がもっとも仮象的な性格をもって呈示される
ときに至るところにある宥和の契機です。つまり、宥和の約束がもっと
も完全に与えられるのは、同時に世界が〔仮象の〕壁によってあらゆる
「意味」の侵入からもっとも厳重に守られているときなのです。(Ebd.,
365 [79])

これらの引用を見る限りでは、アドルノもベンヤミンの理解を継承しており、
仮象を、偽りの意味内容を持った現象とみなしている。しかしながら異
なる点もある。アドルノは、われわれに現れる仮象の意味内容を現実として
理解している。この現実とは、虚偽でもなければ独断的な迷妄でもないとい
うことである。ただしアドルノは単純に、仮象を偽ではなく真なるものだ、
と主張しているのではない。というのも彼は、仮象に（さらに言えば視覚に）
歴史性を見出しているからである。この歴史性とは、自然や神話と対立する
歴史を指すのではない。それは歴史の歴史性だけでなく、自然の歴史性も指
すのである。そしてもちろんこのことは同時に、歴史にも自然性あるいは神
話性もあることを示している。こうして仮象は、理念から離れた外観として
偽りの配置を示すが、現実的現象としてひとつの意味を持ち、理念とは異なる
別種の眞理性を含むものに転じるのである。アドルノは、われわれの見る
ことと合致する現象が、たんなる見せかけに留まるのでなく、この合致に
よってわれわれにもたらされる「偽りの」意味にも一種の眞理を認めている
のである。そしてアドルノにとって仮象は、それはそれで何かを現出させて
おり、それ自体で現実的なものである。そして彼にとって仮象は、宥和の契
機をもたらすものとして肯定的に評価されるのである。

以上のように、視覚的である仮象は、それとは異なる意味内容を持つ限り

において、反視覚的だとも言うるのである。

4. 星座と救済／宥和

星座の歴史性と仮象の真理性は、視覚的なものから反視覚的なものへ、そして反視覚的なものから視覚的なものへの転変を示していた。この転変を統一するものとしてふたりが取り上げるのが、救済あるいは宥和である。救済と宥和は、いずれも彼らにとっては真理の統一として理解されているが、仮象の場合と同様に、そのあり方についてふたりの間に相違がある。

前述のように、ベンヤミンにおいて、現象が理念へと救済されることによって、「真理の真正な統一」が実現し、理念としての星座がわれわれに呈示される。その際われわれは、視覚の領域において、呈示された星座を受け取る。星座は、われわれが見ることとは合致しないので、われわれは能動的に理念を見ることができない。その意味で、われわれは星座にたいして受動的である。このことは、現象の救済にたいしてもわれわれが受動的だということも意味する。それゆえ、われわれは自ら救済と真理の統一を実現することができない。つまりわれわれは救済の主体ではない。ベンヤミンにおいて、この救済と統一の主体は、われわれ（の見ること）の側にはないと言っているのである。

これにたいしてアドルノにおいて、宥和は自然と歴史との関係という文脈の中で言われる。つまり一方で、歴史的なものがその歴史性を失い、自然的なもの⁵⁾に変わり、他方で自然的なものが歴史性を帯びたものに変わりうる。星座が反視覚的であるのは、星座の歴史性のためであるが、われわれの見ることと不可分である。それゆえ、たとえ星座がわれわれの見ることと合致していないとしても、星座は呈示されることによって視覚的なものに転じる。この転化をつうじて、星座は視覚の領域に固定され、われわれが見ることのできるものになる。これとともに星座は、その歴史性を喪失する。だが同時

に、別の星座がわれわれに呈示してくるのである。それゆえ星座は、視覚において固定されつつも、次々に別の配置とともに呈示されてくるのである。

さらに、仮象もまた、われわれが見ることのできる現象のひとつであった。この仮象は理念との不一致ゆえに虚偽的であったが、それ自体で現実的意味を持っていた。その意味は、われわれが視覚の領域において本来真理として見るものとは異なる。つまり仮象は、われわれが見ることのできるものとして固定されることから解放されている。それゆえ仮象は歴史的に転化するものである。

以上のように、星座や仮象が転変するこの過程もまた、それ自体で歴史的な性格を持ってくる。そしてこうした一連の歴史的過程が宥和をもたらすのである。その際、星座はかならずしも宥和の主体であるわけではない。この歴史的過程において、宥和の主体は星座から星座へ、あるいは星座と仮象との間を次々に移り変わってゆく。この主体性は固定されることはなく、主体自体もまた歴史的に転変するのである。

おわりに

これまでの考察をまとめると次のようになる。星座は視覚との関係が不可欠であり、それ自体で視覚的である。だが星座は視覚の領域において、われわれの見ることに背いて呈示される。その限りにおいて星座は、反視覚的性格を帯びている。なぜ星座が反視覚的かと言えば、星座が歴史性を含むからである。では星座はもっぱら歴史的で反視覚的かと言えば、かならずしもそうではない。星座は、われわれが見ることによって視覚的なものの中にとり込まれる。逆に視覚的である仮象が、見せかけ以上の意味内容を持つという点で反視覚的になる。星座の反視覚性は視覚的なものに転じるし、視覚的なものも反視覚的なものに転じる。この視覚と反視覚との関係において、両者の統一、つまり救済あるいは宥和が構想される。これは星座の呈示の主体

は何かという問題に帰結する。理念としての星座の主体性が想定される一方で、視覚の領域において主体性が歴史的に転変する事態も見出される。

このように、星座の比喩は、一方でアドルノ（そしてドイツ哲学）における反視覚中心主義的な側面を示している。だが他方で星座の比喩が語られることは、それ自体で視覚との関係を意識せざるを得ない側面も示している。冒頭で取り上げた「図像化禁止」も、否定的に視覚との関係を示し、場合によっては視覚の特権性さえも示していると思われるのである。

＊本稿は、日本学術振興会科学研究費 JP26284007（「間文化性の理論的・実践的探求―間文化現象学の新展開―」、研究代表者・加國尚志（立命館大学文学部教授））による研究成果の一部である。

註

- 1) あらかじめ確認しておくべきなのは、この「星座」という訳語である。原語である *Konstellation* あるいは *Konfiguration*（ベンヤミンもアドルノも、とくにこのふたつを峻別して用いているわけではない）は、「配置」や「布置（状況）」などと訳されることもあり、彼らもすべての箇所において「星座」という意味でこの語を用いているとは限らない。その一方で、以下の本文でも示すように、明らかに「星座」になぞらえて彼らがこの語を用いている箇所はある。本稿では、彼らがこの語に、ニュアンスの強弱はあるにせよ、「星座」の意味を含んで用いているという理解のもと、考察を進めることにする。Cf., Peter Fenves, *The messianic Reduction. Walter Benjamin and the Shape of Time*. California, 2011.
- 2) この発想はゲシュタルト理論に源流をもとめることができる。そしてこのことは、ベンヤミンだけでなくアドルノにもまた同様にあてはまる。
- 3) ただし、こうした理念の呈示は、前述の瓦礫と廢墟をつうじてはじめて可能となる。その意味で仮象を含む現象界は真理の契機であるが、それと同時に仮象はあくまで仮象であって真理でないとも言える。
- 4) こうしたベンヤミンの見解は、少なくとも『ドイツ悲劇の根源』に妥当するものであり、彼のすべての主張にあてはまるわけではない。
- 5) 自然的なものは、「神話的なもの」とも呼ばれ、われわれにとって対象的なもの、われわれの彼岸にあるものを意味する。それは自然法則の支配下にある必然性の世界でもある。

文献一覧（引用は原著および邦訳の頁数を示す）

- Martin Jay, *Downcast Eyes. The denigration of vision in twentieth-century French thought*. Berkeley and Los Angeles, 1993 〔マーティン・ジェイ『うつむく眼 二〇世紀フランス思想における視覚の失墜』亀井大輔・神田大輔・青柳雅文・佐藤勇一・小林琢自・田邊正俊訳、法政大学出版局、2017 年〕
- Walter Benjamin, *Ursprung des deutschen Trauerspiels*. In: *Gesammelte Schriften*. Band 1, herausgegeben von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Frankfurt am Main 1974. 〔ヴァルター・ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源（上）』浅井健二郎訳、ちくま学芸文庫、1999 年〕
- Theodor W. Adorno, Die Aktualität der Philosophie. In: *Gesammelte Schriften*. Band 1, herausgegeben von Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main 1973. 〔テオドール・W・アドルノ「哲学のアクチュアリティ」『哲学のアクチュアリティ 初期論集』細見和之訳、みすず書房、2011 年〕
- , Die Idee der Naturgeschichte. In: *Gesammelte Schriften*. Band. 1, herausgegeben von Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main 1973. 〔「自然史の理念」『哲学のアクチュアリティ 初期論集』細見和之訳、みすず書房、2011 年〕

